

発表日：2016年10月23日

第10回 NPO法人 ニューマン理論・研究・実践研究会 対話集会

## 造血幹細胞移植後1年未満で困難感を抱いている

### 患者・家族とのニューマン理論に基づいた ケアリング・パートナーシップのケア

大政 智枝  
神奈川県立がんセンター

【目的】全体論に準拠したM.ニューマンの「拡張する意識としての健康」の理論を理論的枠組みとして、移植後1年未満で困難感を抱いている患者と家族が、看護師である研究者とケアリング・パートナーシップの体験をもつならば、患者と家族にどのような変容が生まれ、研究者はどのような気づきを得るかを探究する。

【研究方法】デザインは実践と研究を重ねた実践的看護研究であり、ニューマンが提唱する解釈学的、弁証法的方法を用いた。ケアリング・パートナーシップとは、ニューマンが提唱する「パターン認識のプロセス」を活用したケアである。データは参加者と研究者の対話の逐語録と研究者が記載した自己内省ジャーナルであった。データ分析方法は、逐語録を丁寧に読み返し、参加者が自分のありようを認識し、意味を掴み、思考や感情や行動が変化したと思われる部分にアンダーラインを引き、それらを短文化して時間の経過の中で相対的に変化を捉えた。

【結果】研究参加者は、骨髄移植後4か月目、退院後1か月が経過し、生活にいまだなじめず困難感を抱いていたAさんとその夫（ともに50歳代前半）であった。研究者は移植看護に携わる18年目の看護師で、参加者とパートナーを組み対話を核とした面談を行った。

結果として、1回目の面談は、Aさんの夫の関心事である疾患や治療に関する話に終始した。2回目の面談で仕切り直し、「意味ある出来事や人々」について話してくれるよう誘った。結婚後は義父母で助け合いながら生活していたが義父の死後、寺の仕事に夫婦で忙しく従事してきた物語が開示した。3回目の面談では、研究者が描いた夫婦の人生パターンの表象図を分かち合った。すると、夫婦は今まで仏教の教えに基づいて生きていたが、それに縛られた生き方をしていたということに気付き、その囚われから解き放されて、「迷ってもよい」「いまを生きればよい」という洞察を得て、新たな人生を夫婦で歩み出した。さらに4回目の面談では、葬儀にまつわる体験から他者の喪失体験の意味を理解することの重要性に気付き、それを研究者と分かち合い、その意味がさらに深まりAさん夫婦全体が意識として拡張した。

研究者は、夫婦の成長・進化を目の当たりにし、夫婦よりやや遅れながら成長・進化し多くの学びを得た。その内容は、自身の看護師としての実践のなかで気付かずにいた人の見方や先入観の特徴を認識した。そして大事なことは、自分がもつ先入観を手放し、患者・家族が関心を抱いていることを心をこめて聴き、その対話を通して患者・家族に重要な洞察が生まれることを信じて寄り添うこと、短い対話の中にも誠意をもって相互作用的なかわりを深めて、そこに込められた“意味”を理解しようと努力することであった。

【考察】ニューマン理論を踏まえて、Aさん夫婦の健康体験のプロセスとその意味について検討した。夫婦は、人生における「意味ある出来事や人間関係」を語る中で、自己の囚

われから解き放たれ、ターニングポイントを迎えて眞の仏道の道に導かれ生きようという新しい生き方を見出したと意味づけることができた。さらに看護師も自分自身を知ることが重要であるという点で意味を明確にできた。これらのことは先行研究に一致し、また、Aさん夫婦が成長・進化したプロセスは、「意識の拡張は意味の深まりであり、意識の拡張には終わりがない」と述べているニューマン理論を支持した。以上のことから、ケアリング・パートナーシップは、造血幹細胞移植後1年未満の患者・家族のケアとして活用できるであろうということである。